

# 「静岡の茶草場農法」によって 守られるフジタイゲキ

ふじのくに地球環境史ミュージアム 准教授

早川 宗志

日本一のお茶どころとして有名な静岡県。しかし、農林水産省（2025）によると、2024年の荒茶生産量は鹿児島県が初の首位（27,000 t;シェア40%）となり、静岡県（25,800 t;シェア39%）は公表記録が残る1959年から65年間も維持してきた首位から初めて陥落した。

他方、茶園面積では依然として静岡県（12,800 ha）は鹿児島県（8,150 ha）よりも多い（農林水産省2025）。生産量と茶園面積の首位が両県で逆転しているが、これは1番茶、2番茶、3番茶と何番茶まで収穫するかや、機械化の程度の違いを反映しているのだろう。

## 放棄茶園

静岡県の茶業では、茶園面積が年々減少している（静岡県経済産業部農業局お茶振興課2025）。そのため、静岡県中西部に位置する牧之原台地などのお茶どころにおいても、放棄された茶園を見つけることがある（図-1）。茶園が放棄されると、刈り揃えられることのなくなったチャノキが高さ3mほどに育ち、整った茶園が連なる美しいイメージとは異なる景観となる。

放棄茶園では、まず、ツル性の茶園雑草であるアオツヅラフジ、ヤマノイモ、ヘクソカズラなどがチャノキの樹冠を覆うようにパッチ状に生育する。次に、アカメガシワなどパイ



図-1 放棄1年目の茶園（2023年9月10日撮影）

オニア（先駆）性の木本植物が侵入してくる。

放棄茶園は、常緑のチャノキが密に生育する被陰環境であるため、植生遷移のスピードはさほど速くもないように感じている。放棄茶園の植生遷移にも興味があるため調査したいとは思っているものの、3mかつ密に育ったチャノキ群落の中に立ち入ることは物理的に不可能である。そのため、上空からのドローン調査が必要なことから実施に至ってはいない。

放棄された茶園を再び整備するには、まずはチャノキを伐根して、幼木を植え、数年して再び茶摘みができるまでの時を必要とする。

## 世界農業遺産「静岡の茶草場農法」

さて、静岡県の茶業の特色をひとつ紹介したい。

静岡県中西部では「茶草場農法」という茶畑に刈り取ったススキやアズマネザサなどを敷くことで品質の高いお茶を生産する独自の伝統農法が実践されている（稲垣・楠本2016）。この刈敷のために維持される草地を「茶草場」という。秋冬に刈り取ったススキやアズマネザサなどの茶草を積み上げて乾燥後（図-2）、茶畑に敷く（図-3）という手間ひまをかけた農法である。「静岡の茶草場農法」は、2013年にFAO（国際連合食糧農業機関）によって世界農業遺産（GIAHS）に認定されている。

茶草場には、秋の七草やフジタイゲキ、ササユリ、リンドウ、ホトトギス、ワレモコウなどの草性植物が生育している。茶草場、茶畑、雑木林などの管理が異なる多様な植生がモザイク状に狭い範囲に存在することによって多数の生物が生育できる環境が提供されている。

## 茶草場農法が守ったフジタイゲキ

長年にわたって茶草場農法を実践してきたことで守られてきた絶滅危惧種にフジタイゲキがある（図-4）。トウダイグサ科のフジタイゲキは静岡県固有亜種で、丘陵地や山地の草原に生育する。夏緑の多年草で、草丈は70-150cm、5月



図-2 茶草を刈って干している様子(菊川市, 2020年1月21日撮影)



図-3 茶草を敷いた茶畑 (2020年1月21日撮影)



図-4 フジタイゲキ (掛川市, 2019年5月30日撮影)

下旬から8月に開花し、花期に上部の莖葉や輪生葉、杯状花序の苞葉が黄色に色づくことが特徴である (Kurosawa *et al.* 1996)。

フジタイゲキは、1960年頃までは静岡県内の中部・東部・伊豆地域から標本や観察記録があったものの (杉本 1984)、その後の標本記録がなく、1990年代前半の現地調査においても確認できなかったことから、絶滅が危惧されていた (Kurosawa *et al.* 1996; 杉野 2010)。しかし、1996年以降、過去に自生が知られていなかった静岡県中西部の島田市、掛川市、菊川市の世界農業遺産「静岡の茶草場農法」を実践する茶草場から新産地が発見された (杉野 1997; 2010)。さらに、静岡県東部の御殿場市 (東富士演習場)、伊豆市からも再発見された (早川ら 2020; 早川・杉野 2022)。これら5市のフジタイゲキはいずれも草刈りや火入れという人為活動によって維持されるススキなどの半自然草原に生育していた。したがって、長年にわたって行われてきた人為的な草刈り等によって、フジタイゲキが生育できる草原環境が維持されてきたと考えられる。

## エシカル消費

茶草場農家は、良質なお茶を生産するために、長期にわたって茶草の刈敷を行ってきたことで二次的自然草原の維持に貢献してきた。このことは、伝統農法および地域の農事が次世代へと継承されていくことで、副次的に身近な里山の生物を守ることに繋がっていることを示す好例といえる。しかし、高齢化や労働力不足、離農などのために静岡県内の茶園面積が年々減少しているのと同様に、茶草の刈られる面積も減少している。

今後も茶草場の草原と生き物は守られるのであろうか？その答えのひとつは、我々一人ひとりが日々の生活においても、手間ひまかけられた地域の農産物を選択しているかどうかにある。それは、茶草場農法のお茶を買うことは、茶草場農家を介した茶草場の維持とそこにくらす生物を保全する第一歩として繋がっているからである (早川 2025)。

## 参考文献

- 早川宗志 2025. 倉沢, 湯本貴和ら (編) 図説 日本の里山. pp. 88-89. 朝倉書店.
- 早川宗志・杉野孝雄 2022. 静岡県固有亜種フジタイゲキ (トウダイグサ科) の伊豆半島からの再発見. 植物研究雑誌 97, 337-340.
- 早川宗志ら 2020. 静岡県固有亜種フジタイゲキ (トウダイグサ科) の静岡県東部からの再発見. 東海自然誌 13, 123-125.
- 稲垣栄洋・楠本良延 2016. 静岡の茶草場農法. 農村計画学会誌 35, 365-368.
- Kurosawa T. *et al.* 1996. A taxonomical note on *Euphorbia watanabei* Makino (Euphorbiaceae). Acta Phytotax. Geobot. 47, 11-17.
- 農林水産省 2025. 茶をめぐる情勢.
- 静岡県経済産業部農業局お茶振興課 2025. 静岡県茶業の現状.
- 杉本順一 1984. 静岡県植物誌. 第一法規出版.
- 杉野孝雄 1997. フジタイゲキの分布確認. 遠州の自然 20, 60.
- 杉野孝雄 2010. フジタイゲキの生態と保全. 遠州の自然 33, 19-25.